

■学校経営のポイント

全国学力調査の結果を活用するポイント

小島 宏

全国学力調査の結果が9月下旬に公表された。自治体間の格差は縮んだが、依然として「B問題」に課題が残った。あまり平均点や順位にこだわる必要はないが、校長はリーダーシップを発揮して、子どもたちに質の高い学力を保障するために、この調査結果を活用するよう方向付けたい。

自校のデータを整理する

第一は、文科省の全国学力・学習状況調査「報告書」を基にして、自校のデータを問題ごとに分析し、簡潔に整理する。その際、知識・技能の定着をみるA問題、知識・技能の活用力を見るB問題、学習状況を見る質問調査について、出題や質問の趣旨に即して行うように指導する。

全校のこととして検討する

第二に、整理したデータの検討を、例えば、A問題は中学年(2学年)、B問題は高学年(3学年)、質問調査は低学年他(1学年他)というように、全教員を参加させて検討させる。このことによって、全教員の当事者意識を刺激し、学力調査の結果の活用を全校・全学年の一貫した授業の改善・工夫につなげられるからである(注:括弧内は中学校)。

良い点を一層伸ばす

第三に、検討する際に、まず「良い点」を明確にさせることである。このことによって、子どもたちの良さとともに教師の指導法の良さも確認できるからである。本当は、子どもの学習にも教師の指導にも「良い点」が多くあることに気付き、自信を持って前向きに取り組むようになることが期待できる。

そして、「良い点」を一層よくなるように授業の改善・工夫を継続していくことが重要である。

課題の原因を探る

第四に、課題を見つけ、その原因を探らせる。原因を明確に探ることは難しい面もあるが、文科省の

分析法や解釈を参考にして、国語、算数・数学、学習評価、教員研修、教育課程(カリキュラム)等を担当している教員を活用して分析させる。

正答率が高いから問題なし、低いからもっと頑張らせたいという曖昧な受け止めを脱することなしに、真の授業改善は望めない。

授業改善を目指す

第五に、「良い点」をさらによりよくし、「課題」を克服していくためには、授業をどのように改善・工夫していけばよいか、全教員に追究させる。学年会や教科部会などの機会を通して、ワークショップ型で徐々に煮詰めていくようにする。

その結果は、例えば学習指導部などに集約させ、管理職の決裁を得て、全教員で共有する。

チーム学校として実践する

第六に、以上の第三、第四、第五を全教員が共有し、担当する各教科・領域の授業の中で、分担する職務の中で、誠実に実践していくようにする。

その状況は、週案の中に記述するよう指示すれば、教員の自覚を促すとともに具体的に確認することが可能である。

校内研究と関連付ける

第七は、以上の事柄を、校内研究のテーマや内容に組み込んで、実質的な校内研究として進めていくことも考えられる。

自校の子どもたちに「主体的・対話的で深い学び」を通して、「質の高い学力(生きて働く知識・技能の習得、未知の状況(課題)にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性等の涵養)」を定着・維持・向上させることは、学校の最大の責務であることに鑑み当然のことであり、価値のある実践である。

(こじま・ひろし=元公立小学校長・(公財)豊島修練会理事長)

● 2017年版 校長・教頭のための最強スケジュール帳 予約受付中！(11/28刊予定)

2017 スクール・マネジメント・ノート

【監修】小島宏 【企画・製作】教育開発研究所 A5判・268頁／定価(本体2,200円)＋税

■ 研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。